

図書館たより

号数 第 35 号
発行日 昭和52年 3月22日
編集行 島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL(0852)22-5725
印刷 ㈱高浜印刷所

題字：和漢古典から



あ あ 停 年

停年である。肩もこらぬに、五十六歳になったから、退職してくれとの「^{かたまたま}肩敵」にあった。

自分では、一向に年をとったとも、役に立たなくなったとも思わぬが、世の中にはケジメが必要。それに、私の給料が、年功序列型賃金のおかげで、若者三人分に相当するとあっては、頑張るわけにもいかない。はいはいとばかり、おとなしく退職することにきめた。

五年八ヶ月の在任、それはほんの束の間のことだが、県庁生活の最後が、図書館で過ごせたこと、それは私の人生にとって、この上もなく幸せなことであった。権力や地位や金より、もっと素晴らしいものがこの世にあると、物の考え方を変えてくれたからである。

私は幸せな男である。図書館には、人の足を引っ張るようなものはいない。優秀な部下に恵まれ、県立図書館も漸く県の文化センターとしての評価を受けるようになった。

この図書館をいま私はあとにする。正直なところ、確かに淋しい。しかし、私には友がある。図書館と本という友がある。今後は一自由人として、本読みと物書きとを続けたい。そして、信念を貫く男として一生を終りたい。

人には、必ず何らかの意味で停年がある。しかしながら、勉強には停年がない。

島根県立図書館長 遠水保孝

県下にひろがる「古文書を読む会」(三)

浜田市)の巻 横田町)

浜田市の巻

活動開始したのは昭和45年1月20日であった。例会は毎年8月、12月だけを休み、毎月一回第3土曜日の午後1時半から4時半まで、市立図書館を会場にして開いている。例会通知は出しておらず稀に日時の変更をする場合には互に連絡しあっている。会費は年額千円、必要に応じてテキスト代を徴収する。ということでスタートしたが、追徴したことはなかった。会員外の要望によってテキストの残りを販売して経費にあてていた。その後会費を年千五百円に改めて現在に及んで追徴はしていない。

会員数は時により増減しているが、平均30数名である。20歳代から90歳代の老人まで、平均年齢にも変動がある。現在の常連平均は60歳前後であろうか。これも90歳過ぎの高齢者を加えての話である。現職公務員、教員、鉄道職員、商人、僧侶、退職公務員と職員も経歴も種々雑多である。会員中には身辺多事、めったに顔を見せぬ人もあるが、江津市、三隅町、金城町から毎月通って来る熱心家もある。何年も前からテキストだけを送っている京都在住の会員もある。学歴など意識している者は一人もいない。定刻になると小人数でも開会し、誰かが「今日はやめよーやー」とい

えば、テキスト読みはやめて、あとは雑談である。初めから指導力をもった者のいない集いである。

習字の習字より」といってスタートしたのである。図書館の辞書や参考書を持ち出して明快な答を出してくれる人もある。評定もすれば議論もする。読めぬ字があれば書いた者が悪いという。読めなくても内容はわかるといって、読めぬまゝに進んだりする。五年生になっても自信がない、とけんそんな人もある。進度目標もテストもない。段級制もないから、休んでも怠けてもメンツにこだわることもない。解読中にも質問が散発し、話が思わぬ方向に展開し脱線もする。「古文書を読む会」というけれども脱線している時間の多いことしばしばある。実に和気あいあい。

山口線のある駅の駅長時代に入会して、三江線の

駅長に転勤、今退職している会員がある。彼には「長門木与史」という著書まである。彼がこの会に出席するためには、早朝出発して夜に入って帰っていたという。彼はこの漫談雑談から多くのことを教えられたという。

漫談に花が咲けば咲くほど、今日は面白かったとよろこぶ人もある。面白かったとは教えられることが多かった、ということである。漫談の内容は古文書に関係することからスタートするが、派生し脱線することもしばしばある。自由な発言、放談であるが、脱線であって脱線でない。ローカルなテキストを使っているので「古文書を読む会」というよりも「地域の歴史を語る会」になり勝である。

活字印刷はこの地方に関係したもののばかり、図書館所蔵古文書も利用したが、大部分はこの会がテキストにするために集めたもの。一部資料には解説書もつくっている。解説書作製の労をとったのは前図書館長佐々木徳三郎氏であった。

勉強をはじめたいがベテランにはついてゆけない、という人々のために、図書館主催の古文書入門講座が設けられて3年になる。これには婦人が多く、これまでであった会の会員顔まけの熱心ぶりであった。はじめは一日の前半に仮名文、後半に漢字主体の文を勉強していた。仮名

文はすでに卒業の域に達し、普通の古文書解読にもすばらしい進境をみせている。今年の四月には入門講座は発展的解散をして、歴史の古い自主的な会に入会することになっている。

これまでに使ったテキストの一部をのせておく。五人組前書、宗門改帳再案文、宗門(人柄)送状、同受取状、諸証文類、石見銀山要集、石州要見録、御仕書留(松平右近将監時代)、石州浜田御城覚書、浜田御城下町諸事伝帳、町方役儀勤方日記、松平右近将監様松平右近将監様御所替一件、社倉御取立に付規定書、種痘之儀御触書、異国人標着一件、津摩浦漂鯨一件、磯竹村寄鯨一件、湯湊浦漂込鯨一件、役用日記、その他多数。

(筆者 山藤 忠)

天保中五月廿二日
浜田御城下町諸事伝帳
松平右近将監
高橋

(テキストの一例)

横田町の巻

地域社会づくりの一翼は地域文化が
横田史談会
背負うもの。地域文化は中央文化の
うけうりでなく、地域の風土と産業が庶民の生活を
支えて来た地域史の中から芽生えるものであるとい
う考えから、昭和50年5月からこの会を発足させた。
会員数は60名余、協力者を加えると100名に及ぶ。

この会の事業には、史蹟めぐりの集い（現在まで
8回）、考古学を学ぶ集い（1回）たたら研究の集い
（3回）、埋蔵文化財展（1回）、遺跡発掘協力（2回）
があり、古文書を読む集いもその1つで、冬季を主
体とし年間8回位開催している。定例会は毎月第1
土曜日の午後で、時には月に2回開催したこともあ
る。尚、別な機関で毎月発行してい
る機関誌にこの会も協力し、集い
に用いる資料をのせたり、会員の
個人研究や、共同調査の発表をし
ている。

町内4地区(鳥
の集いの常連
上・横田・八
川・馬木)から25名が集まるが70
歳代から20歳代までの老若男女で
ある。農業者が最も多く、主婦の
4人、学校教員3人、役場職員2
名、司法書士そのほかで、婦人は
5名である。老人の中で病気で休

む人があるが、この雰囲気や伝えきいて、真摯な気
持にふれたいと参加者がふえつつある。会の会費は
1人当年額2,000円で、この中から雑費等その都度
出しているが、テキストは複写実費を各人が負担し
ている。(仁多町からも参加者あり)

昭和43年に横田町誌が完成した
著者として講師
が、その時全町内に協力を願っ
て古文書を集めてそれが整理され、目録も完備して
いる(写真のロッカーはその収蔵庫)。一般町民の家
のもの、絲原、卜蔵、桜井(仁多町)ほかのたたら
郷の多量な古文書、由緒ある神社・寺院のもの、さ
らに県立図書館(当時は県庁所有)にある古文書
の中で、仁多郡に関係のあるものごとくを複写
したもの、広島大学にある郡内の全検地帳を写真撮

影した写真とフィルム、さらに江戸中期より明治初
年までの仁多郡にあった御用留など、おびたし
い数にのぼるものである。まだ解説されていないも
のも多い。これらを読みほぐすことによって、地域
史も綴ろう。各自の家の古文書を読んで家の歴史も
知ろうとお互がめざしている。これらの中からも興
味あるものをテキストとしているが、基本的には県
立図書館の協力を得て入門テキストを入手し使用し
ている。

捨子教誡の謡、権市漂流記そのほかに、地元の鉄
穴(かんな)流し水利権争いとか、式内社伊賀多氣
神社の遷宮をめぐる富札に関するものなどを読んだ。

庶民の歴史を身近に感じて当時の追体験を通して
学ぶところが多い。講師は県立図書館の美多、桜木
両氏を招いたが、あとは事前にテ
キストを配布して予習し、数行宛
輪番に読みあわせ、そして歴史の
討議もしている。

地元の古文書を読ん
で、ある短い一期間
のそれを取りまく庶民史をまとめ
て、協力している機関誌にものせ
るものもできてきている。

史談会では、いずれ各地区の特
色ある小字からはじめて、「小字の
歴史を綴る」集いを開催したいと
考えている。会員が世話人となっ

て、その小字の老人を中心に若い人も交えて、小字
の開拓と成立、発展のあとを、古文書と口伝によっ
て明らかにし、一緒になって綴っていききたい。この
ことによって、崩壊しかけている地域社会の連帯の
きずなをよりのおし、地域づくりの役に立てたいと
考えている。そこから小地域の文化が生れてくれれば
大変によろこばしいことである。スローガンよりは
こうしたことを通じて知らず知らずのうちに連帯の
輪をつよめ、ひろげてゆくことが今後の基本的なこ
とであると思う。この夏には町の中心集会所も生れ
る。図書室や資料室も設けられれば、その第1集が
生れるのも促進されることになるであろう。

(筆者 高橋 一郎)



(収集整理された古文書)

昭和52年度 県立図書館各種講座受講生募集要項

「短歌にしたしむ会」「郷土人物史講座」を新設、
「読書教室」は第3火曜日に！！

申込方法 ～ 「住所、氏名、電話番号、受講講座名」をハガキか電話で
〒690 松江市内中原町52 県立図書館振興課普及係まで
(電話) 松江 (0852) 22-5730

申込期日 ～ 3月31日まで

	図書館読書教室		短歌にしたしむ会	郷土人物史講座	古典文学を 読む会	古文書を読む会	
	松江会場	日原会場 東出雲会場				入門講座	中近世講座
開催日	第3火曜		第2火曜	第3火曜	第2木曜 第4	第1土曜	第3土曜
時間	13.00 ～15.00		10.00 ～12.00	10.00 ～12.00	14.00 ～16.00	13.30 ～15.30	13.30 ～15.30
会場	県立図書館	山村開発 センター 中央公民館	県立図書館	県立図書館	県立図書館	県立図書館	県立図書館
募集人員	20名		30名	50名	30名	50名	50名
開催期間	1 年						
対象	一般	婦人	一般	一般	一般	一般	一般
経費	無料	無料	テキスト代 を除き 無料	テキスト代 を除き 無料	テキスト代 を除き 無料	テキスト代 を除き 無料	テキスト代 を除き 無料
講師	各地域における読書関係 の指導者		よみうり しまね文芸 歌壇選者 原定夫	県立図書館 藤岡大拙 藤沢秀晴 ほか	元広島女学 院大学教授 宍道達	県立図書館 桜木保	県立図書館 藤岡大拙 藤沢秀晴
内容	読書にしたしみながら人生に、社会にあるいは文化に対する見方、考え方を養う目的から誰でも気軽に参加できる講座です。参加者はグループを作って、集団読書のかたちで、和やかに意見の交換、体験の交流をはかります。		作るより、むしろしたしむ会です。講師を囲んで時には古典を鑑賞し、時には現代の作品、作者を考え、またお互いの作品を自由に語りあう集いです。	歴史と人物——のもつ限らない魅力を追求しながら、郷土島根の人物をとりあげて、古代から現代までの歴史と文化を浮彫りにします。	引き続いて「源氏物語」の講読と鑑賞を行います。原文の解読にとりくみつつ、王朝文化の精髓にふれる高度な講座です。	県立図書館が編集した「古文書ハンドブック」その他のテキストを使用します。初歩から手ほどきし、読解力の養成につとめる講座です。	入門講座を終えた程度の読解力をもつ人が対象になります。テキストを使用して読解はもとより、史料の背景をなす郷土の歴史に及ぶ講座です。

中国地区公共図書館職員研究集会

事例発表より

去る2月17日、鳥根県立図書館において上記研究集会が開催されました。6名による体験発表と、討議が行われましたが、その中の2つの体験発表要旨を掲載しました。

大田市親子読書運動の歩み

大田市教育委員会 社会教育課長 岩谷淳一

① 親子読書への歩み出し

幼児をあずけて働きに出かける母親の増加、テレビのとりこになる子どもたち、こうした家庭における親子の交流の場は極度にせばめられつつある。この時にあたり、働く母と幼児の交流の場として、昭和48年から公民館の職員が読みきかせ等を始めた。

② 親子読書の位置づけと方法

イ. 読書習慣の芽生えの時期といわれる就学前の幼児を対象。

ロ. 市立図書館、公民館、幼稚園、保育園（一部の小学校）と連携のもとに行なわれる活動である。地域住民の交流の場として公民館が主体となる。

ハ. 一般図書とは別に親子読書専用の絵本を確保した。

ニ. 幼稚園、保育園を図書の交換場所として1冊の本を1～2週間まわし読みをする。

ホ. 家庭において夕食後、または就寝前に10～15分間、母親（時には父親、祖父母）が幼児に読み聞かせをする。

ヘ. 地区別に2～3ヶ月に1回集団学習をする。時には中央から講師を依頼する。

例：棕 鳩十氏

ト. 年に1度、全市の親子読書研修会をもつ。

③ 親子読書の現状と問題点

• 幼児対象で発足した親子読書が、現在では小学1～2年に広がりつつある。

• 親子読書に参加しているお母さん、小学校、同PTA、公民館の協力により、公民館に子ども図書館が誕生。

• 親子読書巡回指導車（16ミリ映写機、スライド映写機付）の寄贈を受けた。

• 「親子読書のしおり」を印刷配布。

• 親子読書で芽ばえた読書習慣を就学後、継続育成していくための指導方法。

• グループの自立をめざしたい。受動的な読書から、能動的な読書へ。

• 運動はお金と辛抱のいる仕事である。

岡山市立図書館における地域文庫、家庭文庫の育成について

岡山市立図書館 奉仕係長 平井洋一

○岡山市内の文庫開設状況は地域文庫4、家庭文庫20である。

地域文庫は移動図書館車廃車を利用(例 ふじみ、みのり)又はプレハブの集会所、役場跡等が利用されている。(例 玉柏、操陽)

家庭文庫は自宅、又は寺院で開設している。

○開設の動機としては、熱心な母親の呼びかけ、又自動車文庫の駐車場から町内会、こども会の活動に発展していったということがあげられる。

○図書館との連携、協力としては

• 文庫開設までの準備、運営について指導、助言
• 団体貸出、リクエストの実施、紙芝居台本の貸出
• B.Mによる巡回

• こどもの本、読書についての研修会(主催は各団体)

例「岡山こどもの本の学校」
「こどもの本研究会」「ストーリーテリング研究会」「えほん研究会」

• 行事について図書館と文庫の相互協力

各催しへの図書館員の参加、読書会の開催等があげられる。



(スライドによる発表)

○図書館が直接タッチしていないが「岡山子ども文庫連絡協議会」が昭和50年7月に発足している。この会の目的は、子供文庫の充実発展をはかり、よりよいこどもの読書の推進をはかることにあり、情報交換、運営上の問題、新しい文庫開設についての協力援助、こどもの本についての研修会の開催等を行なっている。

○文庫運営の効果と問題点

効果：文庫を通じて地域の連帯感が強まり、秋祭り開催等、地域の文化センター的役割を果たすようになった。

問題点：文庫運営役員の交代による活動の変化がおこる。(熱心な人、そうでない人)

寄贈、持ちより図書のため、魅力に乏しい。

○今後の計画

地域文庫、家庭文庫の育成強化につとめ、重点地区公民館への図書配置の増冊。又、こども専用自動車文庫の巡回、子ども文庫連絡協議会の活動強化をはかる。

「図書館づくり運動入門」

図書館問題研究会 草土文化 950円

現在日本各地に文庫づくりの運動や、図書館設置運動がまきおこっている。こうした運動は、「子どもによい本を」「歩いていけるとところに図書館を」という住民（多くは主婦）の欲求が高まっておこったものである。本書は、そうした人々に、実践の参考にと、図書館要求の住民運動の経験を集め編集したものである。その経験報告は90余りあり、それぞれに、運動のきっかけ、どのような要望書を出し、また請願にいったか、その結果どうなり、またどのように進行中か、これからどのような方向にもっていくか、ということが詳しく記されていて、従来の図書館論とは異なり、非常に実践的である。それに加えて、図書館づくり住民運動と地方自治の関係を示し、これから運動をおこそうとする人の手引書として参考となる本である。

「高橋和巳の思い出」

高橋たか子著

構想社 880円

高橋和巳が思想的にも文学的にも成熟の時を迎えようとしている時、惜しまれながら逝ってから6年になろうとしている。これは17年間共に暮した、たか子夫人の思い出の書である。和巳氏の愛読者なら手を出したくなる本である。

観念世界に没頭すると他人の心がわからない。内へ内へと増殖していく憂うつ、そんな和巳氏を

「主人の人間を思う時、私には弱い人とか哀しい人というイメージしかない」「私は作家の不幸な奥さんになりたいと若い頃夢想していたとおり、本当に作家の不幸な奥さんになった。」

概観は苦労話ばかりだが、夫人の和巳氏に対する尊敬の念は、苦労を感じる事はなかったのではないだろうか。夫人の才能と病的な感覚に着眼して、小説を書くようにすすめたのは和巳氏であった。そんな夫人の「臨床日記」の章は感傷をぬきにして書かれている。それが殊更いたましい。

「子育てごっこ」

三好京三著 文芸春秋 1,100円

第76回直木賞受賞。

未就学児童をとり扱った珍しい作品である。作者自身が教職にあるという強みで、現実感に富み、同じ職業を持つ夫婦の問題にまでふれている。

東北の過疎村の分校に、突然、放浪画家の老人（実は、作家のきだみのる）と孫娘がやってくる。その娘は、外見は、おとなびた都会的な言動をするにもかかわらず、学校教育を受けたことがないという。そのためか、わがままで、協調性がない。そこで、分校の教師夫婦がめんどうをみることになる。

自分の子供を持ったことのない夫婦が問題児の家庭教育に生活を蹴弄され、2人の間までおかしくなる。これらを夫と妻、それぞれの眼を通して交互に描き、まとまりをみせている。事実に基づいたユニークな小説。

「ディダコイ」

ルーマー・ゴッデン著

評論社 980円

ジプシーと白人の混血娘、キジイは曾祖母と一語にトレーラーの中に住んでいた。

しかし曾祖母の死によって、彼女は白人社会になげ出される。風俗習慣、価値観の全く違う世界で生きていかねばならない過程に生じるキジイの不安や孤独、そして葛藤を生き生きと描き出したのが、この作品である。

作者ルーマー・ゴッデンは、イギリスの生まれであるが、幼少の頃インドで暮らし、教育のため本国に送り帰された。突然別世界に放り出されたゴッデンの心境と、キジイのそれとは共通するところがあるだろう。キジイをとりまく大人の中には、彼女の心を傷つけないようにふるまうデリケートな人が多い。とりわけ、ブルックさんは冷静な判断と愛情で、かたくなに自分の殻に閉じこもる彼女を解き放していく。

この作品は、乾いたユーモアと、ピリリとした風刺でもって、大人にも十分楽しめる。

新刊図書紹介

“HOT NEWS”

半額（片道）県費負担実現！ メール制による図書貸出の送料

郵送による図書の貸出制度は3年前の昭和49年4月にスタートした。当初送料は片道県費負担を考えていたが、財政当局の理解が得られず、見切り発車していたものである。その後住民および図書館がわの強い要求にもかかわらず、財政ひっ迫という予期せぬ事態が起り、容易に実現しないうでいた。

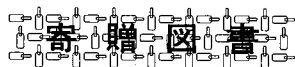
しかしその間、利用者全額負担という悪い条件にもかかわらず、この3年間に登録者は140人に達し、貸出冊数は695冊におよんだ。1回借りるのに少なくとも往復で約500円はかかる現状から、この数字はやはり、図書の貸出希望が多いという事実を示していると思う。

やっとこのたび、半額ではあるが、送料の県費負担が実現し、関係者一同ほっと胸をなでおろしている次第である。これからは今までの2倍、3倍と利用が伸びると思われるが、係員が悲鳴をあげるほど借りて欲しいものである。

ところで、これからの問題としては、①郵送料の全額県費負担があり、②当館所蔵図書の有無を調査する蔵書目録の広範囲への配布がある。このことはつとに津和野町立図書館の岡田館長が指摘されたところであるが（「図書館だより」26号 S49年6月号）、県立図書館は今後この目標に向っての努力を忘れてはならないであろう。

メール制による貸出の要点

- (1) 利用できる人
県内に居住する方、又は県内で勤務もしくは在学する方で、遠隔地居住者又はからだの不自由な方
- (2) 登録の手続き
①氏名・生年月日 ②住所・電話番号・郵便番号 ③勤務先又は学校名 ④保険証(健康)の記号と番号を明示して申し込み下さい。(電話も可)
- (3) 図書の請求
図書名を明示して申し込んで下さい。(電話も可)
〔図書の選択は各市町村教育委員会、各公共図書館等に備えてある蔵書目録を利用して下さい〕
- (4) 冊数と期間
原則として3冊(2kg)まで。30日間。
- (5) 貸出しない図書
①貴重図書 ②郷土資料 ③辞書等の参考図書 ④その他館長が貸出を不相当と認めるもの
- (6) 送付の方法および送料の負担
発送・返送は原則として書籍小包で行ない、当館使用の封筒を利用する。
送付に要する経費は①発送については図書館、②返送については利用者が負担する。
- (7) 申し込み先
松江市内中原町52 〒690
島根県立図書館 奉仕課 メール制 (0852) 22-5739
(メール制についてお尋ねになりたい場合もこの係まで)



ご惠贈ありがとうございます。

図書名	住所	氏名	図書名	住所	氏名
島前の伝承	隠岐郡	大上 朋美	筑紫みち	宍道町	狩野 鈴子
高松教育百年史	出雲市	別所 健治	みなと紀行	大阪市	難波 利三
横田物語	益田市	大庭 美一	海上	玉湯町	小原 仁志
詩集 風土記	斐川町	高田 正七	蛮族	松江市	福代 包男
ふるさと日御碕	大社町	宍道 正年	潮騒	東出雲町	東出雲文学懇話会
現代と仏教	出雲市	上井 一顕	山陰の仏教考古	松江市	島根県教育文化財団
斐川東中学校30年史	斐川町	斐川東中学校	隠岐・海士の素顔	隠岐郡	波多 絵一
			心のなかの散歩道	松江市	三島由記子
			島根における社会保障	松江市	柳浦 文夫
			島根造形教育の展望	出雲市	永田 滋史
			石見神楽	仁摩町	吾郷 清彦
			文学の可能性	松江市	中村 正明

ひとりのできる
—生活習慣と自立—

文 部 省 特 選
カ ラ ー 30 分
青 年、成 人 向

幼児の習慣形成はなかなかむつかしく重要である。従来とかく型にはめこんだり、形式の強制になりやすかったが、はたしてそれでいいのか今一度考えてみてはどうだろう。

この映画は幼児の成長と発達に応じ、その心理的变化に対応しながら、その子の将来の自主的活動を促進し、自立的態度を育てることに重点をおいている。そして、これに生活習慣をからませ、自分の力で身につけていくように、環境条件を整えていくことの肝要さを、巧みな映像で写し出している。今までとかく解説になりがちなこの種の教材としてはめずらしい作品である。

ある事態を提示して、その意味を子どもに考えさせる。そしてかれらの自立心を触発、育成しながら生活習慣をマイペースで身につけさせる——。

そんな方法を示唆している点は、しつけ教育の新しい道として、大いに参考にしてほしいものである。

日本昔話シリーズ

対象 幼・小(低) 各10分

一休さん(いつきゅうさん)

一休さんが、寺の和尚や、こまの屋の太平さんをトンチでやり込め、その頭の良さが有名になり、都へまでも、そのうわさが広まりました。そして、ついには、將軍さまの耳に入り、「それは面白い奴じゃ、さっそくつれてまいれ、ということになり、將軍さまとトンチ問答することになりました。そして見事將軍さまをまかしてしまおうという話。



しょうじょう寺の狸ばやし

昔々、証誠寺という寺がありました。ある日、一人の坊さんが来て、この寺に住むことになりました。ところがこの坊さん、狸のイタズラにはいっこうに平気、おまけに、狸の腹つぶみを見ると自分も入って来て遊ぶしまつ。こうなったら狸にも意地があります。和尚と腹つぶみくらべです。

一寸法師(いっすんぼうし)

子どものない老夫婦に、親指ほどの子が授かりました。ある日、都へ行って出世したいと言って、お椀の舟に乗って京へ上ります。大臣の家来になって、姫のお伴をしておのり道。都を騒がしている鬼を退治した後に残された打ち出の小ツチをふると……。

文福茶釜(ぶんぶくちやがま)

声を出す茶釜/古道具を集めるのが大好きという和尚さんも、さすがに気味悪がってクズ屋にあげてしまいました。ところがその茶釜は声を出すだけでなく、手が出、足が出、しっぽまででてきました。茶釜がタヌキに化けたのです。さあクズ屋さんはビックリ……。

父と母への赤信号

カ ラ ー 30 分
文 部 省 選 定
成 人 向

家出をめぐる少年の非行をよく耳にする。その際、結果だけを重視して、何がこの子をここまで追いやってたかという原因の追求や対策に欠けるきらいがある。この映画はその点に留意しながら、両親が家庭においてなすべき日常の細かい配慮を、的確に導き出させるものである。

内容は小学6年生の息子の家出という問題を設定、非行の芽生えの早期発見、予防を重視する観点で貫かれている。「児童福祉司と母親の対話」を軸として、非行の事実が明るみに出されてくるといふ、教育映画としては珍らしく、一種推理映画的な形式をとり興味深く見られるように工夫して作られている。

少年非行の予防はいかにすべきか、その根源は家庭であり、父母の考え方や態度がいかに大切であるかを考えさせられる。

P T A 集会、各種婦人集会、母親集会に適したフィルムである。